

■バーバー／ヴァイオリン協奏曲 Op.14

サミュエル・バーバー（1910-1981）は20世紀のアメリカでロマンティズムを追求する保守路線を歩んだ作曲家である。実験主義のジョン・ケージが1912年生まれなので、ほぼ同世代だが、1918年生まれのレナード・バーンスタインにより近いメロディアスでリリックな音楽を書き続けた。協奏曲やソナタなど、古典的な形式をとりながら新鮮さを盛り込んだ作品は演奏家たちに好まれ、いくつかは今日のレパートリーとして定着している。

29歳の時に作曲されたヴァイオリン協奏曲はその筆頭にあげられる。カーティス音楽院を卒業後、ローマ大賞を受けていた彼は若手のホープで、実業家から娘のヴァイオリニストのための協奏曲を委嘱されたのだが、華麗な技巧を聴かせる曲を求めている意向と異なったことからひと悶着。さらに第3楽章は演奏不可能と酷評され、委嘱の前払い金の返却まで要求された。だが、カーティス音楽院の学生が2時間の練習でみごとに弾きこなしてバーバーの窮地を救ったという。

伝統的な急・緩・急の3楽章構成ながら、リリックな楽章が続いたのち、終楽章は一気に駆け抜けるという独創的な流れを持つ。いきなりヴァイオリンの独奏で始まる第1楽章アレグロは、その静かな第1主題と、クラリネットによる弾むような第2主題によるソナタ形式。透明感のある響きのまま、メロディがとりとめなく移ろっていくような雰囲気である。第2楽章アンダンテはその気分を引き継ぎながら、オーボエが哀感の漂うメロディを奏でる。オーケストラを主体とする抒情的な部分に、独奏ヴァイオリンが主体となる中間部が続き、最後は両者が一つになる形の3部形式。度重なる転調に不安感がよぎる。第3楽章プレスト・イン・モート・ペルペトゥオはわずか110小節の短いフィナーレ。技巧的なパッセージで独奏ヴァイオリンが動き、管楽器セクションとの掛け合いで聴かせる。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。